

# 自閉症児の言語発達の類型化の試み\*

丸井文男 蔭山英順<sup>1)</sup> 神野秀雄<sup>1)</sup> 生越達美<sup>2)</sup>  
佐藤勝利<sup>3)</sup> 水野真由美<sup>4)</sup> 園田紀子<sup>5)</sup>

## I はじめに

われわれは、自閉症の診断カテゴリーの再検討を Kanner 型、Asperger 型にとらわれないで、治療的経過から捉えなおす試みを進めてきている。自閉症児に対し、個人遊戯療法、集合的個人遊戯療法、集団遊戯療法を通して積極的に働きかけ自閉症状全体の変化を把握しようとしてきた。そして自閉症状の変化を捉える為に対人関係、対物関係、行動特性、言語特性、感情表現といった軸を設定し事例報告をした「丸井ら(1970)」。また客観的に治療の変化を捉える為に VTR (video tape recorder) を用いて治療過程を詳細に分析した「丸井ら(1971)」。これらの研究を通して各症状の変遷が明らかになってきたが、本研究に於ては、自閉症状の中でも特に重要と考えられる言語症状に視点をあて、言語発達の経過を捉え、その類型化を試みていきたい。勿論自閉症の診断カテゴリーを検討する場合、自閉症状全体を考慮することが必要であるが、今回はまず言語発達のみを絞り、その発達の変化を考察していく。

## II 問題

Kanner (1943) は、自閉症児の言語の発達異常として (1)言葉の発達遅滞、(2)繰り返し言語、(3)独語、(4)緘黙、(5)反響言語、(6)無応答、(7)抑揚とアクセントの欠如、(8)自発的な文章構成の欠如と特異な文法による文章、(9)人称代名詞の欠如、(10)比喩的な言辞の10項目をあげているが、自閉症児の $\frac{2}{3}$ は話すことができるようになるが $\frac{1}{3}$ は終生言葉が出現しないと述べている。Kanner (1971) は、最近になり初期に発表した11事例の28年後の状態について報告している。その論文によれば、11名の中で、

- 1) 名大大学院教育学研究科教育心理専攻博士課程学生
- 2) 同上修士課程学生
- 3) 中部工業大学講師
- 4) 研究生
- 5) 研究補助員

なお上記のほか、学部学生山本秀人が参加した。

\* 本研究は昭和47年度厚生省心身障害研究費の補助による。

2名が比較的社會に適應しており、職業をみると1名は、銀行の金銭出納係、他の1名は、あるオフィスで働いている。また言語面でも非常に改善されてきている。しかし、他の9名は、施設、病院に入っている事例もあり、言語に関しても多くの特異な言語症状が改善されないうままである。Kannerの報告にみられるように、予後(社會適應)を考える場合、当然のことではあるが言語が重要な役割をもつことになる。Eisenberg (1956) は、自閉症児が5才頃 useful speech を保持しているか否かによって予後が決定されることを指摘し、予後の最も重要な指標になりうることを強調している。川端(1965)は、12例の自閉症児の言語症状を横断的に三群に分け、言語発達の障害が予後と密接な関係のあることを述べている。以上の研究は言語発達と予後との関連をみているといえる。

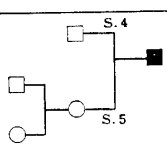
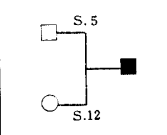
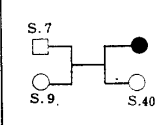
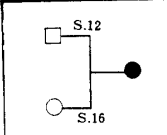
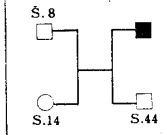
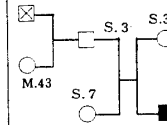
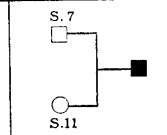
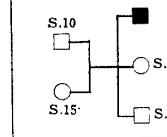
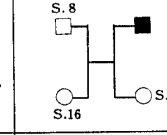
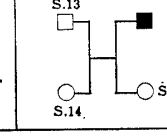
独語、エコラリア、繰り返し言語といったいわば病理言語に関する研究は、Kanner (1946)、増田ほか(1965, 1966)、小沢ほか(1968)、石井ら(1963)の研究にみられるが、発達の、縦断的視点が十分考慮されていないといえる。

以上の諸研究を参考にし自閉症児の言語発達の類型化をすすめるにあたり、次の3点を総合的にみていくことが重要であると考えられる。(1)言語の消失の有無とその期間(発達の病理)、(2)エコラリア、繰り返し言語、独語のあり方(病理言語)、(3)言語発達の速度(発達速度)。本研究に於ては、自閉症児の言語発達は、治療的働きかけを通してどのように発達し、変化していくのかを明らかにし、上述の3つの視点に立って言語発達の類型化を試みることに主目的である。

一方最近自閉症児の言語に関して新しい問題が提起されてきている。Kanner 以来一次的な障害は、感情的接触の障害であり、重い social withdrawal の為に話さないという考え方がある。Asperger 型の自閉症を紹介した平井(1968)も同様な考え方に立脚している。Rutter (1968, 1971) は、言語はあるが、それをいようとする動機づけが欠如しているから話さないという考え方ではなく、追跡研究の結果から社会的な面が改善されても、言語が改善されないことが多いことを見出し、基本

自閉症児の言語発達の類型化の試み

表1-1 ケースの概要(1)

ケース 生年月日	家族構成	生 育 歴			発 症 時 期
A (男) S.36.10.25.		胎生期 異常なし 出産時 満期、仮死産 定 首 0 : 3 始 歩 1 : 2 ~ 1 : 3	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) 始 語 1 : 6	4 : 4 ひきつけ	2 : 7 ごろエコラリア、同一性の保持、常同行動が頻繁になる。
B (男) S.38.4.3.		胎生期 異常なし 出産時 異常なし 定 首 0 : 3 始 歩 1 : 8	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 1 : 6		1 : 0 すぎ子どもが来ても遊ばない、喜ばない、反応が少ない。 2 : 0 に興味の偏りが明確になる。
C (女) S.38.9.3.		胎生期 軽度妊娠中毒症 出産時 9ヵ月、早期破水 未熟児(2100g) 定 首 0 : 6	始 歩 1 : 6 既往歴 3ヵ月スマイル(+) 0 : 3 人見知り(-) 始 語 3 : 8	化膿により 左足太腿部分 手術	0 : 3 ~ 1 : 0 に発症と推定されるが2 : 10で対人関係における症状などが明確になる。
D (女) S.40.11.8.		胎生期 初期に流産の傾向 出産時 満期、仮死産 定 首 ?	始 歩 0 : 10 既往歴 3ヵ月スマイル(-) なし 人見知り(+) 始 語 1 : 0		1 : 5 ごろ独りあそびが多くなる。 2 : 4 ごろ同一性の保持、常同行動が見られはじめる。
E (男) S.39.4.1.		胎生期 異常なし 出産時 異常なし 定 首 ? 始 歩 1 : 0	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 1 : 0		1 : 0 すぎから多動になり、3 : 0 になっても子どもに無関心、奇声が出てくる。4 : 0 に文字への興味が強、それにこだわる。
F (男) S.38.2.16.		胎生期 異常なし 出産時 帝王切開 定 首 0 : 3 始 歩 1 : 0	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 1 : 0 以前		2 : 0 すぎで子どもへの無関心、興味の偏り、常同行動などが見られはじめ大人には誰とでも慣々しい。
G (男) S.40.1.30.		胎生期 異常なし 出産時 異常なし 定 首 0 : 3 始 歩 1 : 0	3ヵ月スマイル(-) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 1 : 0		0 : 10 で表情なく、視線が合わなくなり、空笑が出てくる。
H (男) S.40.7.20.		胎生期 異常なし 出産時 鉗子分娩 定 首 ? 始 歩 1 : 3	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 不明 EEG異常あり (2 : 0 前)		2 : 0 ごろに症状が出はじめる。
I (男) S.41.6.6.		胎生期 異常なし 出産時 異常なし 定 首 ? 始 歩 1 : 2	3ヵ月スマイル(-) 既往歴 人見知り(-) 始 語 0 : 10	乳児期、1ヵ月に1 回位、高熱(42℃)を 出した。	1 : 10 に言葉がなくなり、友だちと遊ばなくなった。
J (男) S.40.11.23.		胎生期 異常なし 出産時 異常なし 定 首 ふつう 始 歩 0 : 10	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) 始 語 2 : 0	アレルギー性鼻炎湿 疹、4 : 0 ひきつけ EEG異常あり(3 : 0)	2 : 0 ごろ子どもに無関心、多動、同一性の保持、固執性、興味の偏りがみられはじめる。

的な障害は、sound の理解に障害があるとしている。高木(1972)は、Rutter と同じ考え方をしており『「自閉症候群」は言語発達の症状である。言語の発達が停止し、それに従って2次的に精神全般の発達が停止し、

そして症状が固定していく中で、退行症状として周囲からのひきこもりとか、Kanner が述べたような症状が出てくる。3才前後から5才くらいまでに言語発達がみられない場合、対人関係の障害が自閉的な形にでてくる』

原 著

現 在 症	クラス	治 療 *
話しことばは単語のみで発音は不明瞭である。非常によく動きまわる。同一性の保持は余り強くないが、興味の狭さ、それへのこだわり、常同行動はかなり強い。対人関係は視線も非常に合いにくく、母親、治療者など、ごく限られた人へのみわずかの働きかけがある。	特殊学級	7 : 5より 3年7ヵ月間 S.44.3～S.46.9 1/2w CI S.46.10 1/w
話しことばは助詞の入った文になっているが、独語、エコラリア、くり返し言語が多い。非常によく動きまわる。興味は狭く、それへのこだわりが強い。常同行動はよくみられる。同一性の保持は強くない。感情表出は少なく視線は合いにくい。大人には相手を無差別に一方的な働きかけをし、子どもとは一緒に遊べない。	普通学級	5 : 11より 3年7ヵ月間 S.44.3～S.46.3 1/2w CI S.46.4～S.47.9 1/2w I S.47.10 1/w I
話しことばは、まだ助詞が十分に使えない。一方的な話しかけが時々あり、抑揚がない。動きは少ない方である。興味は広がってきているが、特定のものへのこだわりは強い。常同行動、同一性の保持もわずかにみられる。感情表出は少ない。視線はかなり合う。対人関係は一方的な働きかけが多いが、時に気持が通じ合う関係が持てる。	特殊学級	5 : 6より 3年7ヵ月間 S.44.3～S.45.9 1/2w CI S.46.10～S.47.10 1/2w G
話しことばは単語で、独語、エコラリアがほとんどである。動きは少ない方である。興味は狭く、常同行動もよくみられ、同一性の保持も強い。感情表出は少なく、視線は合いにくい。対人関係では働きかけはわずかで、まれに関係を持つことができる。	特殊学級	3 : 4より 3年7ヵ月間 S.44.3～S.46.2 1/w CIとI S.46.3～S.46.9 1/2w CI S.46.10～S.47.10 1/w I
話しことばは助詞の入った文になっているが、くり返し言語、エコラリア、独語などが多い。よく動きまわる方である。興味は狭く、こだわりも強い。同一性の保持も強く、常同行動も時々みられる。感情表出はかなりあり、視線はほとんど合う。大人には相手を無差別に一方的な働きかけをし、子どもとは気持が通じ合う関係がかなり持てる。	養護学校	5 : 2より 3年4ヵ月間 S.44.6～S.46.3 1/2w CI S.46.4～S.46.9 1/2w I S.46.10～S.47.10 1/2w G
話しことばは、完成しているが、時に一方的な話しかけがあり、抑揚がない。かなりよく動きまわる。興味は広がってはいるが、こだわりは強く、興味ある対象では、すぐれた能力を発揮する。感情表出は少ない方である。対人関係では大人とは相手のことをかまわない一方的な働きかけをし、子どもとは時々気持が通じ合う関係が持てる。	普通学級	6 : 8より 3年間 S.44.10～S.46.9 1/w I S.46.10～S.47.10 1/2w G
話しことばはほとんどない。かなりよく動きまわる。興味は非常に狭く、同一性の保持はかなり強く、常同行動もよくみられる。感情表出は非常に乏しく、視線も非常に合いにくい。対人関係は働きかけは少なく、一方的なものがほとんどであるが、ごくたまに関係が持てる。	普通学級	4 : 7より 2年11ヵ月間 S.44.11～S.47.10 1/w I
話しことばは助詞の入った文であるが、独語、エコラリア、くり返し言語が多い。動きはかなりある。興味は狭く、こだわりもかなり強い。同一性の保持、常同行動も強く、よくみられる。感情をうまくコントロールできない表出があり、視線はほとんど合う。大人とは慣わしい一方的な働きかけがあり子どもへの働きかけはわずかでほとんど独りである。	特殊学級	4 : 9より 2年5ヵ月間 S.45.5～S.47.10 1/w I
話しことばはほとんどみられない。動きはあるがエネルギーが弱い。興味の対象は狭くこだわりは非常に強い。同一性の保持はかなり強く、常同行動も時々ある。感情表出は乏しく視線は合いにくい。対人関係は一方的な働きかけが多いが、時に気持の通じ合う関係が持てる。	幼稚園	4 : 5より 2年4ヵ月間 S.45.6～S.46.9 1/2w CI S.46.10～S.47.10 1/w I
話しことばは2語文で、エコラリア、独語、くり返し言語などが多い。かなりよく動きまわる。興味の対象は狭く、こだわりは非常に強い。同一性の保持は強く、常同行動も時々ある。感情表出はかなりある。視線はほとんど合う。大人とは相手をかまわない一方的な働きかけが多く、子どもとは気持の通じ合う関係を持てず独りであることが多い。	特殊学級	4 : 10より 2年1ヵ月間 S.45.9～S.46.9 1/w I S.46.10～S.47.10 1/w G

\* I …… Individual Therapy.  
CI …… Collective Individual Therapy..  
G …… Group Therapy.

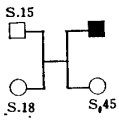
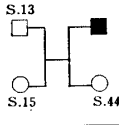
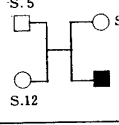
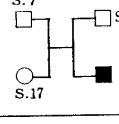
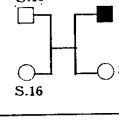
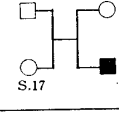
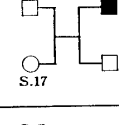
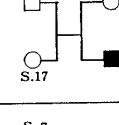
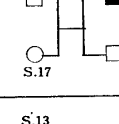
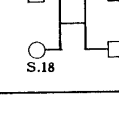
と述べている。このように最近になって特に自閉症状の  
中での言語の位置づけが、問題とされてきている。この  
点についても若干の考察を加えていきたい。

### Ⅲ 方 法

対象. 名古屋大学教育学部臨床心理相談室に來所した  
自閉症児で、少くとも1年以上治療を受けてきている20

自閉症児の言語発達の類型化の試み

表1-2 ケースの概要(2)

ケース 生年月日	家族構成	生 育 歴			発 症 時 期
K (男) S.43.4.20.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	3ヵ月に腎う炎 で薬を服用 異常なし ふつう	始 歩 1:3 既往歴 3ヵ月スマイル(+) なし 人見知り(-) 始 語 2:0	2:0ごろ独りあそび、空笑、常 同行動が見られはじめる。
L (男) S.42.5.22.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	妊娠中毒症 異常なし ? 0:10	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 2:0	2:0ごろ人に対して無関心、視 線が合わない、多動などが見られ る。
M (男) S.40.10.11.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし ? 1:0すぎ	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 1:6	0:6ごろ急にあやしても笑わな くなり、1:6ごろ反応が弱く、 物事に無関心、固執性が見られは じめる。
** N (男) S.42.3.26.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし ふつう 1:1	3ヵ月スマイル(-) 既往歴 人見知り(-) なし 始 語 1:0頃 EEG異常あり (2:6)	1:0ごろ母親がいなくてもいつ までも独りであそんでいる。視線 が合わない、表情がないなどが見 られる。
O (男) S.40.9.13.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 3W早産 未熟児(2500g) 黄疸1ヵ月	定 首 ふつう 既往歴 始 歩 ふつう センソク(1:6~ 2:0、特にひどい) 3ヵ月スマイル(+) 2:0、特にひどい) 人見知り(-) 始 語 1:0ごろ。	2:0ごろ独りあそびが多くなり、 3:0で、同一性の保持、多動、 興味の偏りがはっきり見られる。
P (男) S.42.6.24.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	3ヵ月に流産傾 向 異常なし ふつう	始 歩 1:6 既往歴 3ヵ月スマイル(+) 2:6 舌の手術 人見知り(+) EEG異常あり 始 語 1:0 (4:3)	2:0ごろから独りあそびばかり で人への関心がなく、反応がなく なる。興味の偏り、同一性の保持 が見られはじめる。
Q (男) S.42.6.6.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし 0:3 1:2	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 1:0すぎ	2:0ごろ反応のなさ、常同行動 固執性などが見られる。
R (男) S.39.2.9.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし ? 1:4	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 0:6	2:10ごろ急に言語発達停滞し、 子どもへの関心がなくなり、興味 の偏りが見られはじめる。
** S (男) S.39.2.6.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし ? 1:2	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 1:0前	3:0ごろ子どもと遊べない。興 味の偏り、常同行動が見られはじ める。
T (男) S.43.9.9.		胎生期 出産時 定 首 始 歩	異常なし 異常なし ? 0:11	3ヵ月スマイル(+) 既往歴 人見知り(+) なし 始 語 1:0	1:6すぎ子どもに無関心、言語 消失、同一性の保持、固執性、常 同行動などがみられはじめる。

\*\* ケース N.S.は兄弟である。

名の事例である。自閉症児20名の家族構成、生育歴、現在症、治療期間、治療方法については、その概略が表1に示されている。

自閉症児の言語発達スケールの作成。言語の発達段階

を検討する場合、発音、語彙、構文の3領域に於ける発達が検討されねばならないが、これらを総合的にみた発達は、多くの研究者によって示されてきているが、阪本は、言語発達を7つの時期に分けている「小西(1972、

現 在 症	クラス	治 療 *
話しことばは全くない。非常によく動きまわる。興味は非常に狭く、同一性の保持は強く、常同行動はほとんど一日中みられる。感情表出は乏しい。視線は合いにくく、対人関係ではわずかに母親の感情理解ができる程度で、働きかけもほとんどない。	幼稚園	2:6より 1年11ヵ月間 S.45.11~S.46.9 1/w I S.46.10~S.46.11 1/w I S.46.12~S.47.2 2/w I S.47.3~S.47.10 1/w I
話しことばは2語文中心で、時々3語以上の文もみられるが、独語、エコラリア、くり返し言語がほとんどである。非常によく動きまわる。興味は非常に狭く、こだわりは非常に強い。同一性の保持は強く常同行動もよくみられる。感情はコントロールが悪い表出である。視線は非常に合いにくく、大人とは相手の無差別な一方的な働きかけ、子どもとは関係はもてず、ほとんど独りである。	幼稚園	3:6より 1年11ヵ月間 S.45.11~S.46.9 1/w I S.46.10~S.47.10 1/w G
話しことばは助詞が入った文であるが独語、状況に合わないものも多く、抑揚がない。動きは少ない方である。興味は狭く、こだわりは非常に強い。同一性の保持はないが、常同行動が時々ある。感情はコントロールが悪い表出が時にみられる。視線はよく合い、大人とは対象の狭さはあるが十分通じ合う関係が持て、子どもとは時に通じ合う関係を持ち、一緒に遊ぶことができる。	普通学級	5:2より 1年10ヵ月間 S.45.12~S.46.9 1/w I S.46.10~S.47.10 1/w G
話しことばはほとんどない。非常によく動きまわる。興味は狭く、こだわりは非常に強い。同一性の保持も強く、常同行動は時々みられる。感情表出は少なく、視線はかなり合う。大人とは狭い対象とまれに通じ合う関係を持て、子どもとは全く関係はもてず、ほとんど独りである。	通園施設	4:2より 1年5ヵ月間 S.46.5~S.47.10 1/w I
話しことばは2語文で、独語、エコラリア、状況にふさわしくないものも、多くみられる。動きは多い方である。興味はまだ狭く、こだわりも強い。同一性の保持は強いものではなく、常同行動も時々ある。感情表出はかなりみられ、視線もかなり合う。大人とは働きかけの対象はせまいが通じ合う関係を持て、子どもとは時に関係を持ち一緒に遊べる。	普通学級	5:8より 1年5ヵ月間 S.46.5~S.47.10 1/w I
話しことばはほとんどなく、非常によく動く。興味も狭く、こだわりも強い。同一性の保持も強く、常同行動もよくみられる。感情はコントロールが悪い表出がある。視線はかなり合う。大人とは、対象は非常に狭いが時に気持の通じ合う関係がもてる。子どもとは関係はもてず、ほとんど独りである。	なし	4:0より 1年4ヵ月間 S.46.6~S.47.10 1/w I
話しことばは2語文がみられてきたが、独語、エコラリアがほとんどである。よく動く方である。興味の対象は狭く、こだわりは非常に強い。同一性の保持もかなり強く常同行動も時々みられる。感情表出は乏しい。視線はかなり合う。対人関係はわずかの働きかけしかなく、かつ関係を持つことは非常に難しい。	幼稚園	4:1より 1年3ヵ月間 S.46.7~S.47.10 1/w I
話しことばは、ほぼ完成しており、時に一方的なもの、また抑揚のない表現があるのみで、ほとんど問題はない。興味は広がっているが、多少柔軟性に欠ける。対人関係では多少働きかけの対象の狭さがあるが十分に通じ合う関係をもてる。	普通学級	7:5より 1年3ヵ月間 S.46.7~S.46.9 1/w I S.46.10~S.47.10 1/2w G
話しことばは完成しているが、時に一方的なもの、状況にふさわしくないものが見られる。動きはかなりある。興味の対象は狭く、こだわりは強い。常同行動も時々みられる。感情のコントロールが悪く、かつ非連続な表出である。大人とは、相手を無差別に一方的な働きかけで、子どもへの働きかけはあるが、気持の通じ合う関係を持つことは難しい。	普通学級	7:6より 1年2ヵ月間 S.46.8~S.47.10 1/w I
話しことばはなく、動きは多い方である。興味は非常に狭く、こだわりも非常に強い。同一性の保持もかなり強く、常同行動もよくある。感情表出は乏しく、視線は非常に合いにくい。対人関係では母親の感情理解がわずかにできる程度で、働きかけもほとんどない。	なし	3:0より 1年1ヵ月間 S.46.9~S.47.10 1/w I

\* I……Individual Therapy.  
CI……Collective Individual Therapy.  
G……Group Therapy.

p133)」が、それを部分的に応用し次に示す5段階スケールを作成した。

1. 言語が全くみられない時期
2. ワンフ、ゴーゴーが犬や電車を表わすように発音

3. 名詞の他に動詞、形容詞が含まれ、いわゆる二語しやすい音と意味が結合したもの(擬声語)がみられ、いわゆる片言、一語文の時期(正常発達の1才~1才半に相当する)

自閉症児の言語発達の類型化の試み

- 文の時期（正常発達の1才半～2才に相当する）
4. 多語文(二語文以上)の使用が多くなる。文法力が未熟な為、単語を並べ羅列する傾向がある。助詞も入る時期（正常発達の2才～3才に相当する）
  5. 構成された文章、複文、従文もあられ語彙も豊富になる時期（正常発達の3才～4才に相当する）

又自閉症児の言語発達の測定、自閉症児の言語発達の情報を得る為に、各自閉症児の母親へ質問紙調査を行なった。質問調査票は本論文の末尾に示す通りである。質問項目作成にあたっては、西日本自閉症研究班の作成した「自閉症の疫学研究のためのチェック・リスト」を参考にし、一部分は同じ項目を用いた。また治療過程を記載した記録から言語発達に関する資料を蒐集した。

自閉症児の言語発達の評定。表2は、母親への調査のうち質問項目1～4までの結果を示したものである。来

所以前の子供の言語発達について母親からの資料にもとづいたが、この結果と来所以降の言語発達の状況を総合的に判断して評定した。なお評定にあたっては、研究グループ全員で検討し評定した。

これらの資料にもとづき、自閉症児の言語発達の類型化の視点は、先に述べたように、(1)発達の病理、(2)病理言語、(3)発達速度、といった3点におき、これを軸として類型化を行なった。

IV 結果と考察

20事例の言語発達の変化を図1～図20に示した。図中の斜線はエコラリアの出現時期を示す。先に示した類型化の視点に立って言語発達を類型化すると次の5つの型に分類することができると考えられる。なお各型の代表的な事例については、簡単に言語発達の特徴を述べる。

L・1型…1～2才頃に数語程度は出現するが、3才

表2 自閉症児の言語発達に関する調査結果(項目1～4)

事例(年齢)	始 語	年 二 語 文 の 開 始 の 年	年 三 語 文 の 開 始 の 年	令 語 助 文 の 開 始 の 年	ま エ コ ラ リ ア の 開 始 の 年	く エ コ ラ リ ア が な い 年	年 言 葉 が 消 失 し た 年	め 言 葉 が 再 び 出 始 した 年
A (10:11)	1:6	*	/	/	3:0	8:0	***	/
B (9:6)	1:0	1:6	3:0	3:6	4:0	**→	/	/
C (9:1)	1:0	3:6	6:0	7:0	3:6	8:0	/	/
D (6:10)	1:0	6:7	/	/	6:7	→	1:6	4:0
E (8:6)	1:0	2:0	3:0	4:0	/	/	/	/
F (9:8)	1:0	1:2	1:6	2:0	/	/	/	/
G (7:9)	1:0	/	/	/	7:8	→	3:0	7:8
H (7:2)	1:0	1:3	2:0	2:6	3:0	→	/	/
I (6:4)	1:0	/	/	/	/	/	1:6	5:6
J (6:10)	1:5	3:2	4:0	5:0	3:0	6:6	/	/
K (4:5)	2:0	/	/	/	/	/	3:0	→
L (5:4)	2:0	4:0	4:0	/	3:0	→	/	/
M (6:11)	1:0	3:8	5:3	6:0	1:3	3:6	/	/
N (5:6)	2:2	/	/	/	/	/	2:6	→
O (7:0)	1:0	1:2	4:2	5:0	4:2	→	/	/
P (5:3)	1:0	/	/	/	/	/	3:0	→
Q (5:4)	1:0	3:0	4:0	5:0	4:0	→	/	/
R (8:8)	1:0	1:6	1:8	4:0	3:0	4:0	/	/
S (8:7)	1:0	1:6	3:0	3:0	/	/	/	/
T (4:1)	1:0	/	/	/	1:0	2:0	2:0	→

\* 二語文以上の言葉がまだできていないことを示している。  
 \*\* エコラリアが現在もみられることを示している。  
 \*\*\* 言葉の消失期がないことを意味している。

頃までには消失する。その後5～6才頃からエコラリアがでて緩慢ではあるが言語を獲得していく事例と、全く言語を習得しないままで終る事例とがある。事例D, G, I, K, N, P, Tが該当する。

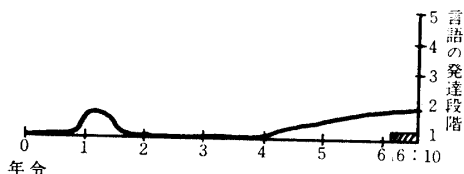


図1 事例Dの言語発達(L・1型)

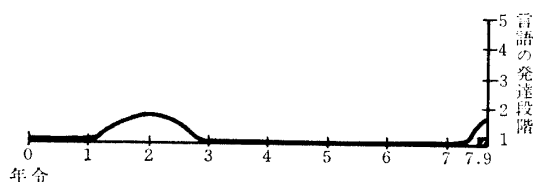


図2 事例Gの言語発達(L・1型)



図3 事例Iの言語発達(L・1型)

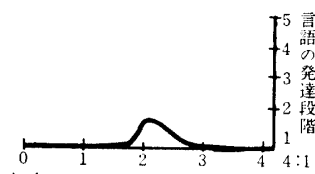


図4 事例Kの言語発達(L・1型)

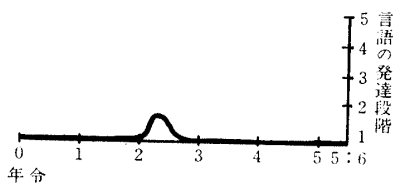


図5 事例Nの言語発達(L・1型)

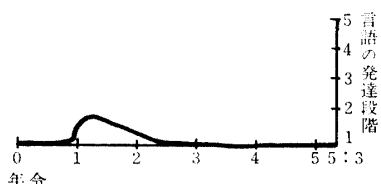


図6 事例Pの言語発達(L・1型)

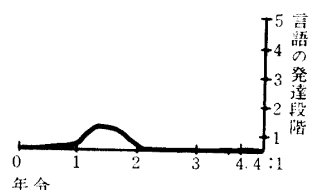


図7 事例Tの言語発達(L・1型)

事例Dは、丸井ら(1970)に報告した事例1及び丸井ら(1971)に報告した事例「鈴○○美」にあたるケースである。始語は1才2か月頃で、当時ワンワ、メー、ヒンヒン、クック等の言葉はあったが、1才8か月頃完全に消失してしまった。来所当時(3才4か月)は、全く言葉はなかった。治療開始後、約1年間ほどは、母子分離がきわめて困難であったが、母子分離が可能になった頃から「オブ、オブ」と言ってT(治療者)に背負われてくることを要求してくるようになってきた。5才頃より本児は、治療場面で自発言語が少しずつでてくるようになってきている。現在までに発語した言葉は、オブ、イヤ、アッチ、ママ、カイジュウ、ネウ(寝る)といった程度であり、言葉と状況が必ずしも一致していなくて、エコラリア的、独語的ニュアンスの強い言葉である。その後ドアのところへ行き、Tに対し「アケテ」といって要求するようになり、少しずつ **communication value** をもつ言葉が増加しつつあるというのが現状である。一方家庭に於ては、母親が理解できる言語量は、約50語であるが、エコラリアが多く自発言語は少いようである。

事例Gは、丸井ら(1970)に報告した事例5である。生後10か月頃までは、順調に育ってきたが、その後急に表情がなくなり、視線も合わなくなり、全く1人遊びになった事例である。このように比較的発病期が明確な事例であるが、1才頃言語としては、ガム、アッタ、マンマの3語のみであったが、それもまもなく消失してしまった。来所時は、本児が4才10か月の時であったが、その後3年間全く言葉はなかった。しかし7才8か月頃よりエコラリアがでてきた。play roomでは、本児とTとの関係ができていた時は、例えばTが積木の絵を読んでいくとオウム返しをしてくるようになってきた。しかしまだ自発言語はない。

事例Iは、丸井ら(1970)に報告した事例8にあたる。本児は、1才半頃より急に言葉が消失し、以後5才半頃までほとんど言葉はでなかったが、6才頃より若干エコラリアがみられるようになり了解可能な言語が数語でてきた。

以上の3事例は、いずれも言語の消失期間が3年～4年とかなり長期にわたっている。その後エコラリアがみられ自発言語が緩慢ではあるが次第にでてきている。し

かし3事例とも発達段階としては、2の段階であり、今後どの水準まで発達していくかは将来を待たねばならない。

事例I, N, K, T, Pは、年令的には現在4才～6才の範囲であり、いずれも1～2才頃数語でまもなく消失している。今後これらの子供達に治療的働きかけを継続することによって先の3事例のようにある程度言語が獲得されていくのか、それとも全く言葉が習得されないままで終わってしまうのか、今後の様子をみなければならぬ。なお事例P及びIは、脳波検査の結果、いずれも異常ありとの結果が報告されている。この脳の器質的障害の存在を疑わせる事実がどの程度言語発達に影響を及ぼすのか、明確な判断はつきかねるのが現状であるが問題点として残るところであろう。

**L・2型**…2～3才頃まで順調に言語発達するが、3才頃急に発達が停止する。自発言語は消失するが、エコラリアはみられ、同じ状態が約1年続く。その後エコラリアは消え、言語発達の回復はきわめて良好である。事例M, Rが該当する。

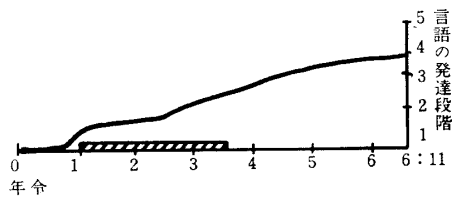


図8 事例Mの言語発達(L・2型)

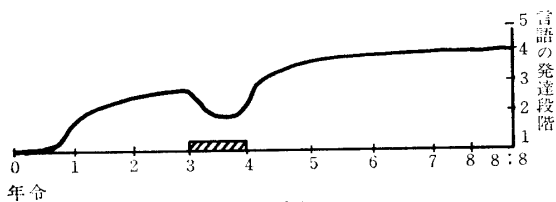


図9 事例Rの言語発達(L・2型)

事例Rは、3才頃急に自発言語が消失し、4才に到るまで約1年間エコラリアだけになってしまった。事例Mは1才後半から3才頃まで約1年半ほどエコラリアだけになった。2つの事例とも自発言語が消失してもエコラリアという形で対人関係が保持されてきている点にL・1型との差(自発言語消失以降の言語発達の良否)がでてきており、人格障害が比較的浅い水準にとどまっていると考えられる。このようなタイプは、自発言語が消失した後、再び出現すると、その後可成り良好な言語発達を示すのが特徴的である。

**L・3型**…2才頃言葉が数語でて、その後徐々に語彙が増加し、5～6才頃片言レベルでピーク

に達する。その後次第に自発言語は少なくなり崩壊していく。エコラリアは初期からあり8才頃までみられる。事例Aが該当する。

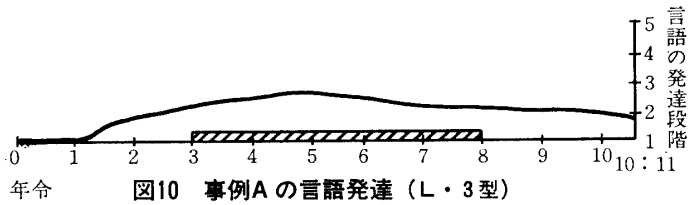


図10 事例Aの言語発達(L・3型)

事例Aは、丸井ら(1970)に報告した事例4にあたる。始語は1才6か月の頃で、「ワンワ、ブブ」などの言葉がで始めている。その後の発達は遅く、3才3か月頃は「パパ、ママ、オトイレ」しかいえなかった。4～5才頃は、「フネ、サンダーバード、オッカイ、オッカイ、バアチャンマッテテネ」など言うことができた。来所時は、本児が7才4か月頃であり、当時2～3の単語を除けば、ほとんど理解不能の言語ばかりであった。最近ではエコラリアもなくなり、(これはL・2型の意味のように **positive** に評価できなくて逆に **negative** な意味をもっていると考えられるが)一段と言語の崩壊の進行を疑わせる事例である。予後はきわめて悲観的な見方をせざるを得ないと思われるタイプである。

**L・4型**…始語の出現は普通程度かやや遅いが、年令のすすむにともなわずかつづではあるが発達し、ある水準までは到達するが、その後の発達はきわめて緩慢である。言語の消失期はない。エコラリア及び繰り返し言語が多く事例に比較的長期にわたってみられる。事例B, C, E, H, J, L, O, Qがこれに該当する。

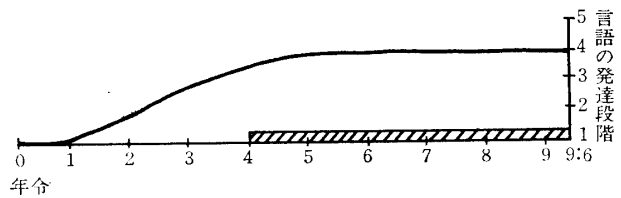


図11 事例Bの言語発達(L・4型)

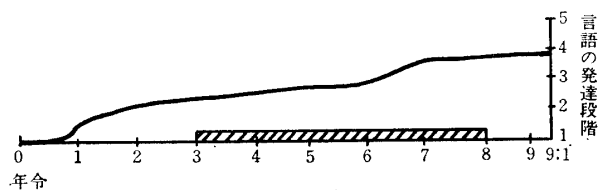


図12 事例Cの言語発達(L・4型)



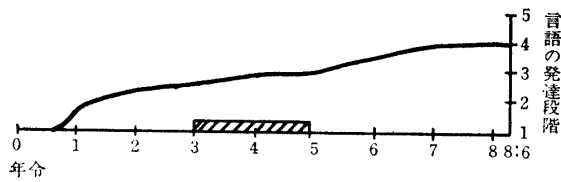


図13 事例Eの言語発達 (L・4型)

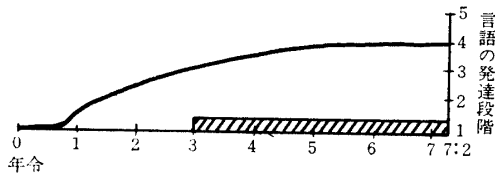


図14 事例Hの言語発達 (L・4型)

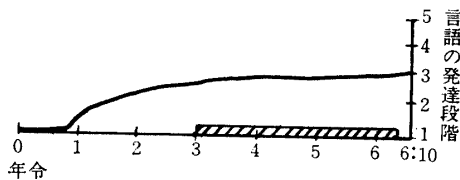


図15 事例Jの言語発達

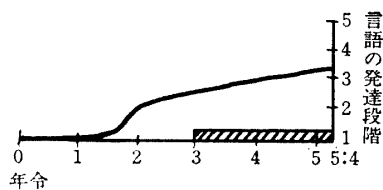


図16 事例Lの言語発達 (L・4型)

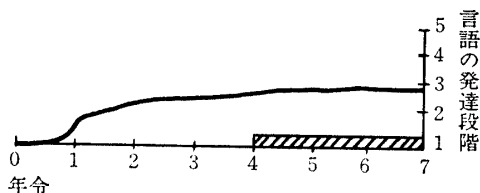


図17 事例Oの言語発達 (L・4型)

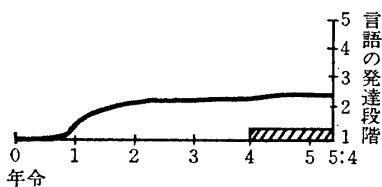


図18 事例Qの言語発達 (L・4型)

事例Eは、丸井ら(1970)の報告の事例6で紹介され、丸井ら(1971)では、事例「大〇登」で報告されたケースである。本事例は、L・4型の典型的なタイプと考えられるので、言語発達の変化を簡単に辿ってみよう。始語は1才過ぎてからで、以後語彙は増加していったが、3才頃は、2語文以上の文章型式にはならなかった。本相談室への来所は、本児が5才2カ月であった

が、その後の治療過程における遊戯治療場面での自発言語について分析する。

5才4か月：水遊びをしながら「コーヒー色、コーヒー色」の繰り返し(状況に合った独語)。絵本を見ながら「都内電車」といい、Tとの間で「都内電車」のやりとりを繰り返す。

6才1か月：水遊びしながら「緑色、みんな緑色になっちゃった」の繰り返し(状況に合った独語)。絵本を見ながらTが「これは」と聞くと「Japan Air Line」といい、このパターンの繰り返しがつづく。

6才3か月：水遊びしながら「今度は、パン・アメリカン航空の紅茶」といいTとの間で「パン・アメリカン航空の紅茶」のやりとりの繰り返し、「白雪がこぼれた、月桂冠がこぼれた」のやりとりの繰り返しがつづく。(状況に合った独語)

6才5か月：「今度ここ、one hundred」とTに言い黒板に数字を書かせる(指示)。「クルクルやって」(身体接触の要求)。おもちゃの車をみながら「うわさの車だよ、こえてる車だよ」とコマmercialを言う(状況に合った独語)。

7才6か月：「先生も遊びに入って」と言う(勧誘)友達に対し「〇〇君2つ2つの歌、歌って」と言う(友人に対する要求)。

7才10か月：「〇〇君今日来る、〇〇ちゃん来る」といったように友達の名前を次から次へと出しTに質問する(質問)。

8才1か月：黒板の近くへ来て「白いので(チョーク)書くんだよ」と言う(命令)。「僕ネー」この人称代名詞が初めてでる。しかし後が続かない。何か非常に言いたそうであるが、それをうまく言語化できない。

このような経過をみると治療初期の段階では、Tとは無関係な自分の遊びとの関連の中で言葉が発せられていたが、治療の展開とともに、他の人との間での言葉が増し、話しかけに応じたり、他者への自発的な言語的働きかけへと変化していった。いわば対人志向の言葉が増えてきたのである。最近では自分のことを「僕」と言葉で言えるようになり、無人称的存在から自一他の区別が明確になりつつあるといえる。本事例は、石井(1963)が質問嗜好現象として指摘した症状をもつ事例であると思われるが、特定の言葉、コマmercial、歌などは、文章も構成されているが、自分自身の感情、意志の表現力は乏しく、特に感情をうまく言語化できない状況にある。

いわゆる繰り返し言語がみられる事例は、他にB、J、H、Lがある。また繰り返し言語もかなり長期にわたって持続しているが、一方エコラリアが存在している事例に関して述べると、事例Bでは、3才から現在にいたる

まで5年余続いている。事例Hは、3才頃から現在まで4年余続いている。事例L、Cもかなりの長期にわたって観察される。結局L・4型は言語発達は、緩慢ではあるが、少しずつ伸びていっている反面、繰り返し言語、エコラリアが長期にわたってみられるといえよう。これらの病理言語の消失は、L・2型に示されているように恐らく言語発達を促進させる方向に向かうであろうと考えられる。

L・5型…言語発達は、ほぼ普通児と同じように発達する。語彙の発達及び構文に関しては全く問題はない。一時的に独語がみられる。抑揚のない話し方には特徴がある。事例F、Sがこれに該当する。

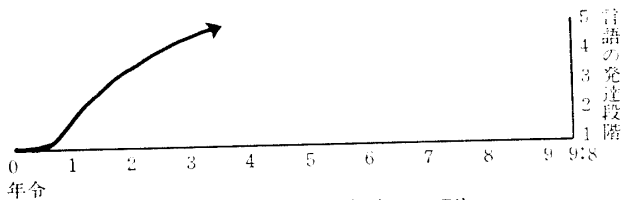


図19 事例Fの言語発達 (L・5型)

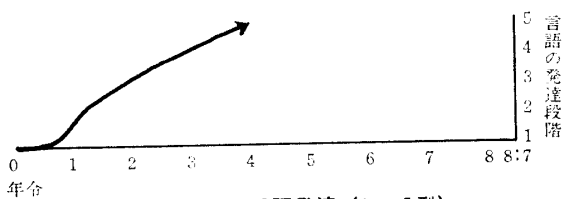


図20 事例Sの言語発達 (L・5型)

事例Fは、この型の典型的なタイプと思われる。始語は1才頃で、「マンマ、ブーブ」などの言葉とほとんど同時に「オカアチャン」などのように比較的明瞭な発音であった。その後語彙、構文に関しては平均以上の速さで発達していった。本事例は、知的にはかなり高く、2才頃平仮名、漢字を覚え、簡単な計算ができ、3才頃にはローマ字を覚えてしまっていた。ある人が「この子は天才ですね」と言ったのに対し「僕2才です」と答えたというエピソードが残っている。本児は、知的な高さに支えられて言語の発達は急速に伸びていった。しかし一方、5～6才頃まで独語がみられたり、きわめて説明口調的な抑揚のない話し方であった。また「……です」「……します」といった大人の使用する丁寧語を日常会話の中で使用する。このような特殊な言語表現は、現在でもかなり残っている。エコラリアはみられない。事例Sは、知的にはやや低いが、その点を除けば、事例Fと同様に、ほぼ正常に言語の発達がみられる。

以上20事例を5型に分類を試みたが、L・1型からL・4型までは、いずれの型に於ても多くの事例にエコラ

リアが出現している。直接話しかけられた言葉を自動的に反復、繰り返すことがエコラリアであり、模倣言語であるが、普通児の発達をみると、急速に言語が発達する前の段階に現われ、言葉のみならず行動全般の模倣期をすぎると消失し、自発言語が獲得されていくと考えられている。津守らの乳幼児精神発達検査にも、「おとなのいった単語をそのまま、まねていう」という項目があり、30か月児で89.4%の通過率を示している。また中西ほか(1971)は、正常児の反響発話の実態を調査し、1才から3才までの資料を蒐集しているが、これをみると1才後半から2才後半にかけてかなり頻繁にみられる。このように正常な言語発達過程においてもエコラリアは重要な役割を果たしていると考えられる。L・1型に於ける事例G、D、Iは、言葉が消失し、再び習得される段階になった時、エコラリアがまず出現している。このようにL・1型におけるエコラリアは、普通児が1～2才頃言語を獲得していくプロセスの中で出現する場合と類似した現われ方である。L・1型の多くの事例は、言語以外の自閉症状もきわめて重く(表1)、自閉性の減少とともに対人関係が改善されてくると、深く関連して言語が獲得されてくるように思われる。L・2型は、自発言語が消失してもエコラリアというかたちで言語が残っている。L・4型では、エコラリアが数年間持続している事例が多い。小沢(1968)は、「すべての反響は人の声のみにおこるのが常であり、そこに対人関係の第一歩を読みとることができる。…… echolalia は、自と他が全く未分化で融合した状態においてみられる primitive な identification の prototype である……」と述べているが、確かに小沢の指摘するように、自閉症状との関連でエコラリアをみると、対人関係ないし疎通性の水準と非常に深くかかわっていると考えられる。このように自閉症児は、普通児にエコラリアがみられる1～2才頃の自一他の未分化な発達段階に固定していると考えられるであろう。

言語発達のみを軸にして20事例を5型に分類したが、比較的良好な発達を示している群は、L・2型、L・5型であり、緩慢な変化しか示さない群は、L・1型、L・3型、L・4型であった。各事例の現在症は、表1に示されているが、言語発達と同様に自閉症状全体の変化を追っていくと、言語発達と自閉性は、parallelな関係にあるといえるであろう。自閉性と言語は、平行して変化しており、言語発達がみられない事例は、自閉性の変化もほとんどない。またその逆もいえるのである。自閉性は少しずつ減少し変化していくが、言語発達のみみられない事例S、Pは、脳障害をかなり疑わせる事例である。治療期間が1年程度の事例もあり、短いこと及び自

閉症状全体の変化をなおまだ十分把握していないことから、今回の結果からただちに **Rutter** の考え方が妥当かどうか、**Kanner** の考え方でいいのかという結論は下せないが、この点に関しては、別の機会に検討し報告する予定である。

なお若干の考察をつけ加えれば、5つのタイプのうち、**L・1型**及び**L・4型**は最も多くの事例を占め、20名中15名と75%に及んでいる。この両型は、言語の発達段階は異ってはいるが、発達速度は遅く非常に変りにくいタイプである。ここに自閉症児に対する治療方法の問題が生じてくる。われわれは、個人遊戯療法、集団遊戯療法、集会的個人遊戯療法を試みてきている。**L・1型**では、個人遊戯療法で、**L・2型**、**L・4型**、**L・5型**では集団遊戯療法を行なっている。自閉症児がある程度要求を治療者にだせるようになり、対人関係が保持できるようになった段階で個人遊戯療法から集団遊戯療法へ移行しているが(表1)、その規準はまだ明確になっていない(神野、蔭山、1972)。このように自閉症児の言語が改善されていかない場合が多いが、梅津ら(1969、1970)は、治療者の受容的態度を前面に出した治療法を批判し「受容を主にした結果は、自閉症児の非人間的傾向を助長してはいまいか」とまで述べ、学習理論に基づいた行動療法を行い、自閉症児に対し言語の訓練を行なっている。また受容的方法に批判的であり、人間学的アプローチをする中根(1969)、石川(1971)らは、治療者が遊びの中で言語的な呼びかけに重点をおく「言語的遊戯治療」を提案している。このように最近になって自閉症児の「言語」が注目され、各治療者それぞれの立場からアプローチがなされている。先に示した20事例をみると**L・1型**、**L・3型**は、言語はきわめて貧弱であり、**L・2型**、**L・4型**、**L・5型**ではかなりの言語を保持している。また年令的にもかなりの幅があり、全く同一の治療法を行うことは疑問である。自閉性の水準、言語発達のレベル、年令、他の自閉症状を考慮し、その子供に最も適した方法がなされねばならないであろう。

本研究に於ては、自閉性の理解にとって重要なfactorと考えられる言語発達の類型化を試みてきたが、われわれのより大きな研究目標は、自閉症の診断カテゴリーの検討であり、言語と自閉性は深く関連しており、自閉症状全体の変化から類型化する場合に得られる結果と今回の類型化が類似してくる可能性もありうるが、これは今後の残された興味ある課題である。

## V ま と め

われわれは、自閉症の診断カテゴリーの再検討をKan-

ner型、Asperger型にとらわれずに、治療的経過から捉えなおす方向で研究を進めてきている。その研究の一環として、今回は自閉症状の中で特に言語発達に視点をあて、自閉症児に対する治療経過の中で、言語発達の变化を把握し、言語発達の類型化を試みた。

言語発達の経過を(1)発達の病理、(2)病理言語、(3)発達速度という軸に立って、その3要因を検討して類型化した。その結果**L・1型**から**L・5型**まで5群に分類することができた。言語発達に関連して病理言語としてのエコラリア、繰り返し言語について若干の考察を加えた。また言語発達と自閉症との関連及び自閉症児に対する治療方法について問題を提起した。なお本研究の問題点を指摘すれば対象となった自閉症児の年令の範囲が広く、かなり低年令の自閉症児が含まれていることである。このことは臨床の実践のなかでは、止むを得ないことであるが、今後、なお治療を継続することによって、より明確な結論が得られることとなるであろう。

## 文 献

- Eisenberg, L. 1956 The autistic child in adolescence. *Amer. J. Psychiat.*, 112, 907—612.
- 平井信義 1968 小児自閉症 日本小児医学出版社
- 石井高明 1963 児童分裂病の自閉的思考に関する1考察 児童精神医学 4, 191—220.
- 石川知子 1971 自閉症児の言語構造 精神経誌 73, 1159—1174.
- 神野秀雄・蔭山英順 1972 自閉傾向児の集団遊戯療法に関する研究 日本教育心理学会第14回大会発表論文集 462—463.
- 川端利彦 1965 “幼児期精神病”における言語発達について 精神経誌 67, 208.
- Kanner, L. 1943 Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217—250.
- Kanner, L. 1946 Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *Amer. J. Psychiat.*, 103, 242—246.
- Kanner, L. 1971 Follow-up study of eleven autistic children originally reported in 1943. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, 1, 119—145.
- 小島 潔 1972 言語教育の心理, 学芸図書株式会社
- 増田稲子 黒丸正四郎・岡田幸夫 1966 所謂自閉児の言語症状の分析について, 児童精神医学, 7, 49
- 増田稲子・黒丸正四郎・岡田幸夫 1966 自閉症児の言語症状の分析 精神経誌 68, 181.
- 丸井文男ほか 1970 自閉症に関する研究—集会的個人

- 遊戯療法の試み— 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 17, 63—116.
- 丸井文男ほか 1971 自閉症に関する研究 —VTRによる治療過程の分析— 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 18, 61—110.
- 中根 晃 1966 幼児の自閉的精神生活について, 精神経誌 63, 1375—1397.
- 中西靖子・大和田健次郎 1969—1970 幼児のことばの発達, 資料2, 反響発話 (1)正常発達の場合 東京学芸大学特殊教育研究施設研究紀要 3, 27—49.
- 小沢 勲 1969 幼児自閉症論の再検討(2) 児童精神医学 10, 1—31.
- 小沢 勲・高木隆郎・佐川紀子 1968 いわゆる自閉症児の言語症状について 児童精神医学 9, 27.
- Rutter, M. 1968 Concepts of autism: a review of research. *J. Child Psychol. Psychiat.*, 9, 1—25.
- Rutter, M. & Bartak, L. 1971 Causes of infantile autism: Some considerations from recent research. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, 1, 20—32.
- 高木隆郎 1972 自閉症問題の当面の課題をめぐって(1) 児童精神医学 13, 8—21.
- 津守 真・稲毛教子 1961 乳幼児精神発達診断法0才～3才まで 大日本図書株式会社
- 梅津耕作・笠 一誠 1969 自閉症児の行動療法(I) 精神医学研究所業績集 16, 45—60.
- 梅津耕作ほか 1970 自閉症児の行動療法(III) 精神医学研究所業績集 17, 61—70.

附 表

自閉症児の母親に対し実施した言語発達に関する調査項目

1. お子さんの始語の時期(なにか意味のあることば, たとえば, ワンワン, マンマ, ブーブなどを始めて言った時期)についてうかがいます。次の中からあてはまる番号を○で囲んでください。
 

1 1才以前	6 3才～4才
2 1才～1才半	7 4才～5才
3 1才半～2才	8 5才～6才
4 2才～2才半	9 6才以上
5 2才半～3才	10 今まで一度も意味のあることばを言わない。
  
2. 何か意味のあることばを言ってからその後, ことばの数はふえていますか。次の中からお子さんに最もよくあてはまる番号を1つだけ○で囲んでください。
  - 1 順調にふえてきた。
  - 2 遅れながらもぼつぼつふえてきた。
  - 3 ほとんどふえていない。
  - 4 いったんことばが出たのにその後ほとんどことばはなくなった。
    - ことばがほとんどなくなった時期は, ( )才( )か月ごろ
  - 5 いったんことばが出て, その後ほとんどなくなったが, 再びことばが出てきた。
    - ことばがほとんどなくなった時期は, ( )才( )か月ごろ
    - 再びことばが出てきた時期は, ( )才( )か月ごろ

3. お子さんはいつごろから次のように言えましたでしょうか。次の1～4のそれぞれにお答えください。(ひとりごとでもかまいません)
- 1 二語文(パパバイバイ, ワンワンナイナイ, ママコッチなど)で話すようになったのはいつごろですか。
    - イ ( )才( )か月ごろ
    - ロ まだ話さない。
  - 2 三語以上つらなるが、助詞(テニヨハ)ははいらないで話すようになったのはいつごろですか。(キシヤトンネルハイル, ワンワンオンモイルなど)
    - イ ( )才( )か月ごろ
    - ロ まだ話さない
  - 3 助詞のはいった簡単な文章で話すようになったのはいつごろですか。
    - イ ( )才( )か月ごろ
    - ロ まだ話さない
  - 4 会話がほとんどふつうにできるようになったのはいつごろですか。
    - イ ( )才( )か月ごろ
    - ロ まだ話さない
4. オーム返し(たとえば, お父さんが会社から帰ってきて「ただいま」というと, お子さんは「お帰り」といわないで「ただいま」というように話しかけられたら相手のいった通りにくり返していること)についてうかがいます。次の中からお子さんにもっともよくあてはまる番号を○で囲んでください。
- 1 今までオーム返しばかりである。
 

オーム返しを話すようになった時期は, ( )才( )か月ごろ
  - 2 以前はオーム返しばかり言っており, 今はオーム返しとふつうのことばと両方言う。
 

オーム返しを話すようになった時期は, ( )才( )か月ごろ

ふつうのことばを話すようになった時期は, ( )才( )か月ごろ
  - 3 以前からオーム返しも話しことばもあったが, 今は話しことばだけを使う。
 

オーム返しを話すようになった時期は, ( )才( )か月ごろ
  - 4 今までにオーム返しはなかった。
5. お子さんの現在のことばの使い方についてうかがいます。あてはまる番号を○で囲んでください。2つ以上でもけっこうです。
- 1 ひとりごと, ふと思い出したことばをいうことがよくある。
  - 2 まったく状況にそぐわないことばの使い方が多い。
  - 3 自己中心的で相手との会話の話題に全く関係のないことを突然いう。
  - 4 相手のことは, まったく無視して自分の要求を伝える。
  - 5 きまりきったことばを, その場と無関係に出す。
  - 6 感情のこもらないしゃべり方や本の棒よみのようなしゃべり方をする。
6. 現在お子さんは, 自分の意志や要求を他人にどのようなしかたで伝えますか。次の中からもっともよくあてはまる番号を○で囲んでください。
- 1 ことばで, 意志や要求を伝える。
  - 2 呼び声など, ことば以外の発声で伝える。
  - 3 ジェスチャーで伝える。
  - 4 相手の手をとって動作でやらせようとする。
  - 5 まったく自分の意志や要求を他人に伝えることはしない。

## A RESEARCH FOR TYPIFYING THE LANGUAGE DEVELOPMENT OF AUTISTIC CHILDREN

Fumio MARUI, Hidenori KAGEYAMA, Hideo JINNO, Tatsumi OGOSHI,  
Katsutoshi SATO, Mayumi, MIZUNO, and Noriko SONODA

This research was attempted to typify the language development of the autistic children. Also this paper was planned in the context of our series of survey attempting to reapply the diagnostic categories for autism through analyzing the therapeutic processes.

Subjects were 20 autistic children (18 boys and 2 girls) who had been experienced individual or group play therapy or both, at the rate of 1 time/1-2 weeks during 18-45 months.

The data collected from the questionnaire for mothers and therapist's records of therapies were analyzed from the viewpoints of (1) disappearance of the language and its period and duration, (2) rate of the language development, (3) existence of the echolalias and their states.

Five types of the language development were identified as a consequence. The characteristics of each type were as follows:

Type L-1. In this type, the languages appeared during first 1-2 years old, but disappeared until about 3 years old. Afterwards echolalias were often shown and spontaneous language developed very slowly.

Type L-2. After normal language development was shown during about 2-3 years old, the development was ceased suddenly and spontaneous language disappeared, except echolalias which remained exceedingly for about one year. After that again the spontaneous language was shown and developed well.

Type L-3. After some language appeared during first 2-3 years, the vocabularies became rich with their functions that did not free from the level of the lisps and during 5-6 years old language development reached its peak. And after that the development was slowed down gradually. Echolalias had been found constantly since first speaking.

Type L-4. First speaking were shown normally or with a slight lateness and languages developed to a certain level with a slow pace, but finally they reached "plateau". Since about 3 years old echolalias and the repetitive language were found frequently and continued for considerable duration.

Type L-5. Since first speaking, some aspects of language development were normal, while the other aspects showed some difficulties; though there are no difficulties in the vocabulary growth, frequently monologues appeared for a time and talking without intonation were always found characteristically. Echolalias were not shown at any time.